芋粥

芥川龍之介

元慶（ぐわんぎやう）の末か、仁和（にんな）の始にあつた話であらう。どちらにしても時代はさして、この話に大事な役を、勤めてゐない。読者は唯、平安朝と云ふ、遠い昔が背景になつてゐると云ふ事を、知つてさへゐてくれれば、よいのである。――その頃、摂政（せつしやう）藤原基経（もとつね）に仕へてゐる侍（さむらひ）の中に、某（なにがし）と云ふ五位があつた。

これも、某と書かずに、何の誰と、ちやんと姓名を明にしたいのであるが、生憎（あいにく）旧記には、それが伝はつてゐない。恐らくは、実際、伝はる資格がない程、平凡な男だつたのであらう。一体旧記の著者などと云ふ者は、平凡な人間や話に、余り興味を持たなかつたら

しい。この点で、彼等と、日本の自然派の作家とは、大分ちがふ。王朝時代の小説家は、存外、閑人(ひまじん)でない。――兎に角、摂政藤原基経に仕へてゐる侍の中に、某と云ふ五位があつた。これが、この話の主人公である。五位は、風采の甚(はなはだ)揚(あが)らない男であつた。第一背が低い。それから赤鼻で、眼尻が下つてゐる。口髭は勿論薄い。頬が、こけてゐるから、頤(あご)が、人並はづれて、細く見える。唇は――一々、数へ立ててゐれば、際限はない。我五位の外貌はそれ程、非凡に、だらしなく、出来上つてゐたのである。

この男が、何時(いつ)、どうして、基経に仕へるやうにな

つたのか、それは誰も知つてゐない。が、余程以前から、同じやうな色の褪(さ)めた水干(すゐかん)に、同じやうな萎々(なえなえ)した烏帽子(ゑぼし)をかけて、同じやうな役目を、飽きずに、毎日、繰返してゐる事だけは、確である。その結果であらう、今では、誰が見ても、この男に若い時があつたとは思はれない。(五位は四十を越してゐた。)その代り、生れた時から、あの通り寒むさうな赤鼻と、形ばかりの口髭とを、朱雀大路(すざくおほぢ)の衢風(ちまたかぜ)に、吹かせてゐたと云ふ気がする。上(かみ)は主人の基経から、下(しも)は牛飼の童児まで、無意識ながら、悉(ことごとく)さう信じて疑ふ者がない。

かう云ふ風采を具へた男が、周囲から受ける待遇は、

恐らく書くまでもないことであらう。侍所（さぶらひどころ）にゐる連中は、五位に対して、殆ど蠅（はへ）程の注意も払はない。有位無位（うゐむゐ）、併せて二十人に近い下役さへ、彼の出入りには、不思議な位、冷淡を極めてゐる。五位が何か云ひつけても、決して彼等同志の雑談をやめた事はない。彼等にとつては、空気の存在が見えないやうに、五位の存在も、眼を遮（さへぎ）らないのであらう。下役でさへさうだとすれば、別当とか、侍所の司（つかさ）とか云ふ上役たちが頭から彼を相手にしないのは、寧（むし）ろ自然の数（すう）である。彼等は、五位に対すると、殆ど、子供らしい無意味な悪意を、冷然とした表情の後に隠して、何を云ふので

も、手真似だけで用を足した。人間に、言語があるのは、偶然ではない。従つて、彼等も手真似では用を弁じない事が、時々ある。が、彼等は、それを全然五位の悟性に、欠陥があるからだと、思つてゐるらしい。そこで彼等は用が足りないと、この男の歪んだ揉(もみ)烏帽子の先から、切れかかつた藁草履(わらざうり)の尻まで、万遍なく見上げたり、見下したりして、それから、鼻で哂(わら)ひながら、急に後を向いてしまふ。それでも、五位は、腹を立てた事がない。彼は、一切の不正を、不正として感じない程、意気地のない、臆病な人間だつたのである。

所が、同僚の侍たちになると、進んで、彼を飜弄（ほんろう）しようとした。年かさの同僚が、彼れの振はない風来を材料にして、古い洒落（しやれ）を聞かせようとする如く、年下の同僚も、亦それを機会にして、所謂興言利口（いはゆるきようげんりこう）の練習をしようとしたからである。彼等は、この五位の面前で、その鼻と口髭と、烏帽子と水干とを、品隲（ひんしつ）して飽きる事を知らなかつた。そればかりではない。彼が五六年前に別れたうけ唇（くち）の女房と、その女房と関係があつたと云ふ酒のみの法師とも、屢（しばしば）彼等の話題になつた。

その上、どうかすると、彼等は甚（はなはだ）、性質（たち）の悪い

悪戯（いたづら）さへする。それを今一々、列記する事は出来ない。が、彼の篠枝（ささえ）の酒を飲んで、後（あと）へ尿（いばり）を入れて置いたと云ふ事を書けば、その外は凡（およそ）、想像される事だらうと思ふ。

しかし、五位はこれらの揶揄（やゆ）に対して、全然無感覚であつた。少くもわき眼には、無感覚であるらしく思はれた。彼は何を云はれても、顔の色さへ変へた事がない。黙つて例の薄い口髭を撫でながら、するだけの事をしてすましてゐる。唯、同僚の悪戯が、嵩（かう）じすぎて、髷（まげ）に紙切れをつけたり、太刀（たち）の鞘（さや）に草履を結びつけたりすると、彼は笑ふのか、泣くのか、わからない

やうな笑顔をして、「いけぬのう、お身たちは。」と云ふ。その顔を見、その声を聞いた者は、誰でも一時或いぢらしさに打たれてしまふ。（彼等にいぢめられるのは、一人、この赤鼻の五位だけではない、彼等の知らない誰かが——多数の誰かが、彼の顔と声とを借りて、彼等の無情を責めてゐる。）——さう云ふ気が、朧（おぼろ）げながら、彼等の心に、一瞬の間、しみこんで来るからである。唯その時の心もちを、何時までも持続ける者は甚少い。その少い中の一人に、或無位の侍があつた。これは丹波（たんば）の国から来た男で、まだ柔かい口髭が、やつと鼻の下に、生えかかつた位の青年である。

勿論、この男も始めは皆と一しよに、何の理由もなく、赤鼻の五位を軽蔑(けいべつ)した。所が、或日何かの折に、「いけぬのう、お身たちは」と云ふ声を聞いてからは、どうしても、それが頭を離れない。それ以来、この男の眼にだけは、五位が全く別人として、映るやうになつた。栄養の不足した、血色の悪い、間のぬけた五位の顔にも、世間の迫害にべそを掻いた、「人間」が覗いてゐるからである。この無位の侍には、五位の事を考へる度に、世の中のすべてが急に本来の下等さを露(あらは)すやうに思はれた。さうしてそれと同時に霜げた赤鼻と数へる程の口髭とが何となく一味(いちみ)の慰安を自分の心に伝へ

てくれるやうに思はれた。……

しかし、それは、唯この男一人に、限つた事である。かう云ふ例外を除けば、五位は、依然として周囲の軽蔑の中に、犬のやうな生活を続けて行かなければならなかつた。第一彼には着物らしい着物が一つもない。青鈍(あをにび)の水干と、同じ色の指貫(さしぬき)とが一つづつあるのが、今ではそれが上白(うはじろ)んで、藍(あゐ)とも紺とも、つかないやうな色に、なつてゐる。水干はそれでも、肩が少し落ちて、丸組の緒や菊綴(きくとぢ)の色が怪しくなつてゐるだけだが、指貫になると、裾のあたりのいたみ方が一通りでない。その指貫の中から、下の袴もはかない、細い足が出て

ゐるのを見ると、口の悪い同僚でなくとも、痩公卿の車を牽(ひ)いてゐる、痩牛の歩みを見るやうな、みすぼらしい心もちがする。それに佩(は)いてゐる太刀も、頗る覚束(おぼつか)ない物で、柄(つか)の金具も如何(いかが)はしければ、黒鞘の塗も剥げかかつてゐる。これが例の赤鼻で、だらしなく草履をひきずりながら、唯でさへ猫背なのを、一層寒空の下に背ぐくまつて、もの欲しさうに、左右を眺め眺め、きざみ足に歩くのだから、通りがかりの物売りまで莫迦(ばか)にするのも、無理はない。現に、かう云ふ事さへあつた。……

或る日、五位が三条坊門を神泉苑の方へ行く所で、

子供が六七人、路ばたに集つて、何かしてゐるのを見た事がある。「こまつぶり」でも、廻してゐるのかと思つて、後ろから覗いて見ると、何処かから迷つて来た、尨犬の首へ縄をつけて、打つたり殴いたりしてゐるのであつた。臆病な五位は、これまで何かに同情を寄せる事があつても、あたりへ気を兼ねて、まだ一度もそれを行為に現はしたことがない。が、この時だけは相手が子供だと云ふので、幾分か勇気が出た。そこで出来るだけ、笑顔をつくりながら、年かさらしい子供の肩を叩いて、「もう、堪忍してやりなされ。犬も打たれれば、痛いでのう」と声をかけた。すると、その子供

はふりかへりながら、上眼を使つて、蔑(さげ)すむやうに、ぢろぢろ五位の姿を見た。云はば侍所の別当が用の通じない時に、この男を見るやうな顔をして、見たのである。「いらぬ世話はやかれたうもない。」その子供は一足下りながら、高慢な唇を反らせて、かう云つた。

「何ぢや、この鼻赤めが。」五位はこの語(ことば)が自分の顔を打つたやうに感じた。が、それは悪態をつかれて、腹が立つたからでは毛頭ない。云はなくともいい事を云つて、恥をかいた自分が、情なくなつたからである。彼は、きまりが悪いのを苦しい笑顔に隠しながら、黙つて、又、神泉苑の方へ歩き出した。後では、子供が、

六七人、肩を寄せて、「べつかつかう」をしたり、舌を出したりしてゐる。勿論彼はそんな事を知らない。知つてゐたにしても、それが、この意気地のない五位にとつて、何であらう。……

　では、この話の主人公は、唯、軽蔑される為にのみ生れて来た人間で、別に何の希望も持つてゐないかと云ふと、さうでもない。五位は五六年前から芋粥(いもがゆ)と云ふ物に、異常な執着を持つてゐる。芋粥とは山の芋を中に切込んで、それを甘葛(あまづら)の汁で煮た、粥の事を云ふのである。当時はこれが、無上の佳味として、上は万乗(ばんじょう)の君の食膳にさへ、上せられた。従つて、吾五位

の如き人間の口へは、年に一度、臨時の客の折にしか、はいらない。その時でさへ、飲めるのは僅に喉(のど)を沾(うるほ)すに足る程の少量である。そこで芋粥を飽きる程飲んで見たいと云ふ事が、久しい前から、彼の唯一の欲望になつてゐた。勿論、彼は、それを誰にも話した事がない。いや彼自身さへそれが、彼の一生を貫いてゐる欲望だとは、明白に意識しなかつた事であらう。が事実は彼がその為に、生きてゐると云つても、差支(さしつかへ)ない程であつた。――人間は、時として、充されるか充されないか、わからない欲望の為に、一生を捧げてしまふ。その愚を哂(わら)ふ者は、畢竟(ひつきやう)、人生に対する路傍の人

に過ぎない。
しかし、五位が夢想してゐた、「芋粥に飽かむ」事は、存外容易に事実となつて現れた。その始終を書かうと云ふのが、芋粥の話の目的なのである。

或年の正月二日、基経の第に、所謂臨時の客があつた時の事である。（臨時の客は二宮の大饗と同日に摂政関白家が、大臣以下の上達部を招いて催す饗宴で、大饗と別に変りがない。）五位も、外の侍たちにまじつ

て、その残肴(ざんかう)の相伴(しやうばん)をした。当時はまだ、取食(とりば)みの習慣がなくて、残肴は、その家の侍が一堂に集まつて、食ふ事になつてゐたからである。尤(もつと)も、大饗に等しいと云つても昔の事だから、品数の多い割りに碌な物はない、餅、伏菟(ふと)、蒸鮑(むしあはび)、干鳥(ほしどり)、宇治の氷魚(ひを)、近江(あふみ)の鮒(ふな)、鯛の楚割(すはやり)、鮭の内子(こごもり)、焼蛸(やきだこ)、大海老(おほえび)、大柑子(おほかうじ)、小柑子、橘、串柿などの類(たぐひ)である。唯、その中に、例の芋粥があつた。五位は毎年、この芋粥を楽しみにしてゐる。が、何時も人数が多いので、自分が飲めるのは、いくらもない。それが今年は、特に、少かつた。さうして気のせゐか、何時もより、余程味が好い。そこで、

彼は飲んでしまつた後の椀をしげしげと眺めながら、うすい口髭についてゐる滴(しづく)を、掌で拭いて誰に云ふともなく、「何時になつたら、これに飽ける事かのう」と、かう云つた。

「大夫殿は、芋粥に飽かれた事がないさうな。」

五位の語(ことば)が完(をは)らない中に、誰かが、嘲笑(あざわら)つた。錆(さび)のある、鷹揚(おうやう)な、武人らしい声である。五位は、猫背の首を挙げて、臆病らしく、その人の方を見た。声の主は、その頃同じ基経の恪勤(かくごん)になつてゐた、民部卿時長の子藤原利仁(としひと)である。肩幅の広い、身長(みのたけ)の群を抜いた逞(たくま)しい大男で、これは、煠栗(ゆでぐり)を噛みながら、黒酒(くろき)の

杯（さかづき）を重ねてゐた。もう大分酔がまはつてゐるらしい。

「お気の毒な事ぢやの。」利仁は、五位が顔を挙げたのを見ると、軽蔑と憐憫（れんびん）とを一つにしたやうな声で、語を継いだ。「お望みなら、利仁がお飽かせ申さう。」

始終、いぢめられてゐる犬は、たまに肉を貰つても容易によりつかない。五位は、例の笑ふのか、泣くのか、わからないやうな笑顔をして、利仁の顔と、空（から）の椀とを等分に見比べてゐた。

「おいやかな。」

「……」

「どうぢや。」

「……」

五位は、その中に、衆人の視線が、自分の上に、集まつてゐるのを感じ出した。答へ方一つで、又、一同の嘲弄を、受けなければならない。或は、どう答へても、結局、莫迦にされさうな気さへする。彼は躊躇した。もし、その時に、相手が、少し面倒臭さうな声で、「おいやなら、たつてとは申すまい」と云はなかつたなら、五位は、何時までも、椀と利仁とを、見比べてゐた事であらう。

彼は、それを聞くと、慌しく答へた。

「いや……忝うござる。」

この問答を聞いてゐた者は、皆、一時に、失笑した。

「いや……忝うござる。」――かう云つて、五位の答を、真似る者さへある。所謂、橙黄橘紅（とうくわうきつこう）を盛つた窪坏（くぼつき）や高坏の上に多くの揉（もみ）烏帽子や立（たて）烏帽子が、笑声と共に一しきり、波のやうに動いた。中でも、最（もつとも）、大きな声で、機嫌よく、笑つたのは、利仁自身である。

「では、その中に、御誘ひ申さう。」さう云ひながら、彼は、ちよいと顔をしかめた。こみ上げて来る笑と今飲んだ酒とが、喉で一つになつたからである。「……しかと、よろしいな。」

「忝うござる。」

五位は赤くなつて、吃(ども)りながら、又、前の答を繰返した。一同が今度も、笑つたのは、云ふまでもない。それが云はせたさに、わざわざ念を押した当の利仁に至つては、前よりも一層可笑(をか)しさうに広い肩をゆすつて、哄笑(こうせう)した。この朔北(さくほく)の野人は、生活の方法を二つしか心得てゐない。一つは酒を飲む事で、他の一つは笑ふ事である。

しかし幸(さいはひ)に談話の中心は、程なく、この二人を離れてしまつた。これは事によると、外の連中が、たとひ嘲弄にしろ、一同の注意をこの赤鼻の五位に集中させるのが、不快だつたからかも知れない。兎に角、

談柄(だんぺい)はそれからそれへと移つて、酒も肴(さかな)も残(のこり)少(すくな)になつた時分には、某(なにがし)と云ふ侍学生(がくしやう)が、行縢(むかばき)の片皮へ、両足を入れて馬に乗らうとした話が、一座の興味を集めてゐた。が、五位だけは、まるで外の話が聞えないらしい。恐らく芋粥の二字が、彼のすべての思量を支配してゐるからであらう。前に雉子(きぎす)の炙(や)いたのがあつても、箸をつけない。黒酒の杯があつても、口を触れない。彼は、唯、両手を膝の上に置いて、見合ひをする娘のやうに霜に犯されかかつた鬢(びん)の辺まで、初心(うぶ)らしく上気しながら、何時までも空になつた黒塗の椀を見つめて、多愛もなく、微笑してゐるのである。……

それから、四五日たつた日の午前、加茂川の河原に沿つて、粟田口（あはたぐち）へ通ふ街道を、静に馬を進めてゆく二人の男があつた。一人は濃い縹（はなだ）の狩衣（かりぎぬ）に同じ色の袴をして、打出（うちで）の太刀を佩（は）いた「鬚黒く鬢（びん）ぐきよき」男である。もう一人は、みすぼらしい青鈍（あをにび）の水干に、薄綿の衣（きぬ）を二つばかり重ねて着た、四十恰好の侍で、これは、帯のむすび方のだらしのない容子（ようす）と云ひ、赤鼻でしかも穴のあたりが、洟（はな）にぬれてゐる容子と云ひ、

身のまはり万端のみすぼらしい事夥(おびただ)しい。尤も、馬は二人とも、前のは月毛(つきげ)、後のは蘆毛(あしげ)の三歳駒で、道をゆく物売りや侍も、振向いて見る程の駿足である。その後から又二人、馬の歩みに遅れまいとして随(つ)いて行くのは、調度掛と舎人(とねり)とに相違ない。——これが、利仁と五位との一行である事は、わざわざ、ここに断るまでもない話であらう。

　冬とは云ひながら、物静に晴れた日で、白けた河原の石の間、潺湲(せんくわん)たる水の辺(ほとり)に立枯れてゐる蓬(よもぎ)の葉を、ゆする程の風もない。川に臨んだ背の低い柳は、葉のない枝に飴(あめ)の如く滑かな日の光りをうけて、梢(こずゑ)にゐる

る鶺鴒の尾を動かすのさへ、鮮かに、それと、影を街道に落してゐる。東山の暗い緑の上に、霜に焦げた天鵞絨のやうな肩を、丸々と出してゐるのは、大方、比叡の山であらう。二人はその中に鞍の螺鈿を、まばゆく日にきらめかせながら鞭をも加へず悠々と、粟田口を指して行くのである。

「どこでござるかな、手前をつれて行つて、やらうと仰せられるのは。」五位が馴れない手に手綱をかいくりながら、云つた。

「すぐ、そこぢや。お案じになる程遠くはない。」

「すると、粟田口辺でござるかな。」

「まづ、さう思はれたがよろしからう。」

利仁は今朝五位を誘ふのに、東山の近くに湯の湧いてゐる所があるから、そこへ行かうと云つて出て来たのである。赤鼻の五位は、それを真(ま)にうけた。久しく湯にはいらないので、体中がこの間からむづ痒(がゆ)い。芋粥の馳走になつた上に、入湯が出来れば、願つてもない仕合せである。かう思つて、予(あらかじ)め利仁が牽かせて来た、蘆毛の馬に跨(また)つた。所が、轡(くつわ)を並べて此処まで来て見ると、どうも利仁はこの近所へ来るつもりではないらしい。現に、さうかうしてゐる中に、粟田口は通りすぎた。

「粟田口では、ござらぬのう。」

「いかにも、もそつと、あなたでな。」

利仁は、微笑を含みながら、わざと、五位の顔を見ないやうにして、静に馬を歩ませてゐる。両側の人家は、次第に稀になつて、今は、広々とした冬田の上に、餌をあさる鴉（からす）が見えるばかり、山の陰に消残つて、雪の色も仄（ほのか）に青く煙つてゐる。晴れながら、とげとげしい櫨（はじ）の梢が、眼に痛く空を刺してゐるのさへ、何となく肌寒い。

「では、山科（やましな）辺ででもござるかな。」

「山科は、これぢや。もそつと、さきでござるよ。」

成程、さう云ふ中に、山科も通りすぎた。それ所ではない。何かとする中に、関山も後にして、彼是（かれこれ）、午（ひる）少しすぎた時分には、とうとう三井寺の前へ来た。三井寺には、利仁の懇意にしてゐる僧がある。二人はその僧を訪ねて、午餐（ひるげ）の馳走になつた。それがすむと、又、馬に乗つて、途を急ぐ。行手は今まで来た路に比べると遙に人煙が少ない。殊に当時は盗賊が四方に横行した、物騒な時代である。——五位は猫背を一層低くしながら、利仁の顔を見上げるやうにして訊ねた。

「まだ、さきでござるのう。」

利仁は微笑した。悪戯（いたづら）をして、それを見つけられさ

うになつた子供が、年長者に向つてするやうな微笑である。鼻の先へよせた皺（しわ）と、眼尻にたたへた筋肉のたるみとが、笑つてしまはうか、しまふまいかとためらつてゐるらしい。さうして、とうとう、かう云つた。

「実はな、敦賀（つるが）まで、お連れ申さうと思うたのぢや。」

笑ひながら、利仁は鞭を挙げて遠くの空を指さした。その鞭の下には、的皪（てきれき）として、午後の日を受けた近江（あふみ）の湖が光つてゐる。

五位は、狼狽（らうばい）した。

「敦賀と申すと、あの越前（ゑちぜん）の敦賀でござるかな。あの越前の――」

利仁が、敦賀の人、藤原有仁（ありひと）の女婿（ぢよせい）になつてから、多くは敦賀に住んでゐると云ふ事も、日頃から聞いてゐない事はない。が、その敦賀まで自分をつれて行く気だらうとは、今の今まで思はなかつた。第一、幾多の山河を隔ててゐる越前の国へ、この通り、僅二人の伴人（ともびと）をつれただけで、どうして無事に行かれよう。ましてこの頃は、往来（ゆきき）の旅人が、盗賊の為に殺されたと云ふ噂（うはさ）さへ、諸方にある。——五位は歎願するやうに、利仁の顔を見た。

「それは又、滅相な、東山ぢやと心得れば、山科。山科ぢやと心得れば、三井寺。揚句が越前の敦賀とは、

一体どうしたと云ふ事でござる。始めから、さう仰せられうなら、下人共なりと、召つれようものを。――敦賀とは、滅相な。」

五位は、殆どべそを搔かないばかりになつて、呟(つぶや)いた。もし「芋粥に飽かむ」事が、彼の勇気を鼓舞しなかつたとしたら、彼は恐らく、そこから別れて、京都へ独り帰つて来た事であらう。

「利仁が一人居るのは、千人ともお思ひなされ。路次の心配は、御無用ぢや。」

五位の狼狽するのを見ると、利仁は、少し眉を顰(しか)めながら、嘲笑(あざわら)つた。さうして調度掛を呼寄せて、持た

せて来た壺胡簶（つぼやなぐひ）を背に負ふと、やはり、その手から、黒漆（こくしつ）の真弓（まゆみ）をうけ取つて、それを鞍上に横へながら、先に立つて、馬を進めた。かうなる以上、意気地のない五位は、利仁の意志に盲従するより外に仕方がない。それで、彼は心細さうに、荒涼とした周囲の原野を眺めながら、うろ覚えの観音経（くわんおんぎやう）を口の中に念じ念じ、例の赤鼻を鞍の前輪にすりつけるやうにして、覚束ない馬の歩みを、不相変（あひかはらず）とぼとぼと進めて行つた。

　馬蹄の反響する野は、茫々たる黄茅（くわうばう）に蔽（おほ）はれて、その所々にある行潦（みづたまり）も、つめたく、青空を映したまま、この冬の午後を、何時かそれなり凍つてしまふかと疑

はれる。その涯には、一帯の山脈が、日に背いてゐるせゐか、かがやく可き残雪の光もなく、紫がかつた暗い色を、長々となすつてゐるが、それさへ蕭条たる幾叢の枯薄に遮られて、二人の従者の眼には、はいらない事が多い。――すると、利仁が、突然、五位の方をふりむいて、声をかけた。

「あれに、よい使者が参つた。敦賀への言づけを申さう。」

五位は利仁の云ふ意味が、よくわからないので、怖々ながら、その弓で指さす方を、眺めて見た。元より人の姿が見えるやうな所ではない。唯、野葡萄か何

かの蔓(つる)が、灌木の一むらにからみついてゐる中を、一疋の狐が、暖かな毛の色を、傾きかけた日に曝(さら)しながら、のそりのそり歩いて行く。――と思ふ中に、狐は、慌(あわ)ただしく身を跳らせて、一散に、どこともなく走り出した。利仁が急に、鞭を鳴らせて、その方へ馬を飛ばし始めたからである。五位も、われを忘れて、利仁の後を、逐(お)つた。従者も勿論、遅れてはゐられない。しばらくは、石を蹴る馬蹄の音が、戞々(かつかつ)として、曠野の静けさを破つてゐたが、やがて利仁が、馬を止めたのを見ると、何時、捕へたのか、もう狐の後足を摑(つか)んで、倒(さかさま)に、鞍の側へ、ぶら下げてゐる。狐が、走れ

なくなるまで、追ひつめた所で、それを馬の下に敷いて、手取りにしたものであらう。五位は、うすい髭にたまる汗を、慌しく拭きながら、漸（やうやく）、その傍へ馬を乗りつけた。

「これ、狐、よう聞けよ。」利仁は、狐を高く眼の前へつるし上げながら、わざと物々しい声を出してかう云つた。「其方、今夜の中に、敦賀の利仁が館（やかた）へ参つて、かう申せ。『利仁は、唯今俄（にはか）に客人を具して下らうとする所ぢや。明日、巳時（みのとき）頃、高島の辺まで、男たちを迎ひに遣（つか）はし、それに、鞍置馬二疋、牽かせて参れ。』よいか忘れるなよ。」

云ひ畢(をは)ると共に、利仁は、一ふり振つて狐を、遠くの叢(くさむら)の中へ、抛(はふ)り出した。

「いや、走るわ。走るわ。」

やつと、追ひついた二人の従者は、逃げてゆく狐の行方を眺めながら、手を拍(う)つて囃(はや)し立てた。落葉のやうな色をしたその獣の背は、夕日の中を、まつしぐらに、木の根石くれの嫌ひなく、何処までも、走つて行く。それが一行の立つてゐる所から、手にとるやうによく見えた。狐を追つてゐる中に、何時か彼等は、曠野が緩(ゆる)い斜面を作つて、水の涸れた川床と一つになる、その丁度上の所へ、出てゐたからである。

「広量（くわうりやう）の御使でござるのう。」
　五位は、ナイイヴな尊敬と讃嘆とを洩らしながら、この狐さへ頤使（いし）する野育ちの武人の顔を、今更のやうに、仰いで見た。自分と利仁との間に、どれ程の懸隔があるか、そんな事は、考へる暇がない。唯、利仁の意志に、支配される範囲が広いだけに、その意志の中に包容される自分の意志も、それだけ自由が利くやうになつた事を、心強く感じるだけである。――阿諛（あゆ）は、恐らく、かう云ふ時に、最（もつとも）自然に生れて来るものであらう。読者は、今後、赤鼻の五位の態度に、幇間（ほうかん）のやうな何物かを見出しても、それだけで妄（みだり）にこの男

の人格を、疑ふ可きではない。

抛り出された狐は、なぞへの斜面を、転げるやうにして、駈け下りると、水の無い河床の石の間を、器用に、ぴよいぴよい、飛び越えて、今度は、向うの斜面へ、勢よく、すぢかひに駈け上つた。駈け上りながら、ふりかへつて見ると、自分を手捕りにした侍の一行は、まだ遠い傾斜の上に馬を並べて立つてゐる。それが皆、指を揃へた程に、小さく見えた。殊に入日を浴びた、月毛と蘆毛とが、霜を含んだ空気の中に、描いたよりもくつきりと、浮き上つてゐる。

狐は、頭をめぐらすと、又枯薄の中を、風のやうに

走り出した。

一行は、予定通り翌日の巳時(みのとき)ばかりに、高島の辺へ来た。此処は琵琶湖に臨んだ、ささやかな部落で、昨日に似ず、どんよりと曇つた空の下に、幾戸の藁屋(わらや)が、疎(まばら)にちらばつてゐるばかり、岸に生えた松の樹の間には、灰色の漣漪(さざなみ)をよせる湖の水面が、磨くのを忘れた鏡のやうに、さむざむと開けてゐる。――此処まで来ると利仁が、五位を顧みて云つた。

「あれを御覧(ごらう)じろ。男どもが、迎ひに参つたげでござる。」

見ると、成程、二疋の鞍置馬を牽いた、二三十人の男たちが、馬に跨がつたのもあり徒歩(かち)のもあり、皆水干の袖を寒風に翻へして、湖の岸、松の間を、一行の方へ急いで来る。やがてこれが、間近くなつたと思ふと、馬に乗つてゐた連中は、慌ただしく鞍を下り、徒歩の連中は、路傍に蹲踞(そんきよ)して、いづれも恭々しく、利仁の来るのを、待ちうけた。

「やはり、あの狐が、使者を勤めたと見えますのう。」

「生得(しやうとく)、変化(へんげ)ある獣ぢやて、あの位の用を勤めるのは、

何でもござらぬ。」
　五位と利仁とが、こんな話をしてゐる中に、一行は、郎等(らうどう)たちの待つてゐる所へ来た。「大儀ぢや。」と、利仁が声をかける。蹲踞してゐた連中が、忙しく立つて、二人の馬の口を取る。急に、すべてが陽気になつた。
「夜前、稀有(けう)な事が、ございましてな。」
　二人が、馬から下りて、敷皮の上へ、腰を下すか下さない中に、檜皮色(ひはだいろ)の水干を着た、白髪の郎等が、利仁の前へ来て、かう云つた。「何ぢや。」利仁は、郎等たちの持つて来た篠枝(ささえ)や破籠(わりご)を、五位にも勧めながら、鷹揚(おうやう)に問ひかけた。

「さればでございまする。夜前、戌時（いぬのとき）ばかりに、奥方が俄（にはか）に、人心地（ひとごこち）をお失ひなされましてな。『おのれは、阪本の狐ぢや。今日、殿の仰せられた事を、言伝（ことづ）てせうほどに、近う寄つて、よう聞きやれ。』と、かう仰有（おつしや）るのでございまする。さて、一同がお前に参りますると、奥方の仰せられまするには、『殿は唯今俄に客人を具して、下られようとする所ぢや。明日巳時頃、高島の辺まで、男どもを迎ひに遣はし、それに鞍置馬二疋牽かせて参れ。』と、かう御意（ぎよい）遊ばすのでございまする。」

「それは、又、稀有（けう）な事でござるのう。」五位は利仁の

顔と、郎等の顔とを、仔細らしく見比べながら、両方に満足を与へるやうな、相槌（あひづち）を打つた。
「それも唯、仰せられるのではございませぬ。さも、恐ろしさうに、わなわなとお震へになりましてな、『遅れまいぞ。遅れれば、おのれが、殿の御勘当をうけねばならぬ。』と、しつきりなしに、お泣きになるのでございまする。」
「して、それから、如何（いかが）した。」
「それから、多愛なく、お休みになりましてな。手前共の出て参りまする時にも、まだ、お眼覚にはならぬやうで、ございました。」

「如何でござるな。」郎等の話を聞き完(をは)ると、利仁は五位を見て、得意らしく云つた。「利仁には、獣(けもの)も使はれ申すわ。」

「何とも驚き入る外は、ござらぬのう。」五位は、赤鼻を掻きながら、ちよいと、頭を下げて、それから、わざとらしく、呆れたやうに、口を開いて見せた。口髭には、今飲んだ酒が、滴(しづく)になつて、くつついてゐる。

その日の夜の事である。五位は、利仁の館(やかた)の一間(ひとま)に、

切燈台の灯を眺めるともなく、眺めながら、寝つかれない長の夜をまぢまぢして、明(あか)してゐた。すると、夕方、此処へ着くまでに、利仁や利仁の従者と、談笑しながら、越えて来た松山、小川、枯野、或は、草、木の葉、石、野火の煙のにほひ、――さう云ふものが、一つづつ、五位の心に、浮んで来た。殊に、雀色時(すずめいろどき)の靄(もや)の中を、やつと、この館へ辿(たど)りついて、長櫃(ながびつ)に起してある、炭火の赤い焔を見た時の、ほつとした心もち、――それも、今かうして、寝てゐると、遠い昔にあつた事としか、思はれない。五位は綿の四五寸もはいつた、黄いろい直垂(ひたたれ)の下に、楽々と、足をのばしながら、

ぼんやり、われとわが寝姿を見廻した。

直垂の下に利仁が貸してくれた、練色(ねりいろ)の衣(きぬ)の綿厚(わたあつ)なのを、二枚まで重ねて、着こんでゐる。それだけでも、どうかすると、汗が出かねない程、暖かい。そこへ、夕飯の時に一杯やつた、酒の酔が手伝つてゐる。枕元の蔀(しとみ)一つ隔てた向うは、霜の冴えた広庭だが、それも、かう陶然としてゐれば、少しも苦にならない。万事が、京都の自分の曹司(ざうし)にゐた時と比べれば、雲泥の相違である。が、それにも係はらず、我五位の心には、何となく釣合のとれない不安があつた。第一、時間のたつて行くのが、待遠い。しかもそれと同時に、夜の明け

ると云ふ事が、――芋粥を食ふ時になると云ふ事が、さう早く、来てはならないやうな心もちがする。さうして又、この矛盾した二つの感情が、互に剋し合ふ後には、境遇の急激な変化から来る、落着かない気分が、今日の天気のやうに、うすら寒く控へてゐる。それが、皆、邪魔になつて、折角の暖かさも、容易に、眠りを誘ひさうもない。

　すると、外の広庭で、誰か大きな声を出してゐるのが、耳にはいつた。声がらでは、どうも、今日、途中まで迎へに出た、白髪の郎等が何か告(ふ)れてゐるらしい。その乾(ひ)からびた声が、霜に響くせゐか、凛々(りんりん)として

凩（こがらし）のやうに、一語づつ五位の骨に、応へるやうな気さへする。

「この辺の下人、承はれ。殿の御意遊ばさるるには、明朝、卯時（うのとき）までに、切口三寸、長さ五尺の山の芋を、老若各（おのおの）、一筋づつ、持つて参る様にとある。忘れまいぞ、卯時までにぢや。」

それが、二三度、繰返されたかと思ふと、やがて、人のけはひが止んで、あたりは忽（たちま）ち元のやうに、静な冬の夜になつた。その静な中に、切燈台の油が鳴る。赤い真綿のやうな火が、ゆらゆらする。五位は欠伸（あくび）を一つ、噛みつぶして、又、とりとめのない、思量に耽（ふけ）

り出した。――山の芋と云ふからには、勿論芋粥にする気で、持つて来させるのに相違ない。さう思ふと、一時、外に注意を集中したおかげで忘れてゐた、さつきの不安が、何時の間にか、心に帰つて来る。殊に、前よりも、一層強くなつたのは、あまり早く芋粥にありつきたくないと云ふ心もちで、それが意地悪く、思量の中心を離れない。どうもかう容易に「芋粥に飽かむ」事が、事実となつて現れては、折角今まで、何年となく、辛抱して待つてゐたのが、如何にも、無駄な骨折のやうに、見えてしまふ。出来る事なら、突然何か故障が起つて一旦、芋粥が飲めなくなつてから、又、

その故障がなくなつて、今度は、やつとこれにありつけると云ふやうな、そんな手続きに、万事を運ばせたい。――こんな考へが、「こまつぶり」のやうに、ぐるぐる一つ所を廻つてゐる中に、何時か、五位は、旅の疲れで、ぐつすり、熟睡してしまつた。

翌朝、眼がさめると、直(すぐ)に、昨夜の山の芋の一件が、気になるので、五位は、何よりも先に部屋の蔀(しとみ)をあげて見た。すると、知らない中に、寝すごして、もう卯時(うのとき)をすぎてゐたのであらう。広庭へ敷いた、四五枚の長筵(ながむしろ)の上には、丸太のやうな物が、凡(およ)そ、二三千本、斜につき出した、檜皮葺(ひはだぶき)の軒先へつかへる程、山のや

うに、積んである。見るとそれが、悉く、切口三寸、長さ五尺の途方もなく大きい、山の芋であつた。
　五位は、寝起きの眼をこすりながら、殆ど周章に近い驚愕（きやうがく）に襲はれて、呆然（ばうぜん）と、周囲を見廻した。広庭の所々には、新しく打つたらしい杭の上に五斛納釜（ごくなふがま）を五つ六つ、かけ連ねて、白い布の襖（あを）を着た若い下司女（げすをんな）が、何十人となく、そのまはりに動いてゐる。火を焚きつけるもの、灰を掻くもの、或は、新しい白木の桶（をけ）に、「あまづらみせん」を汲んで釜の中へ入れるもの、皆芋粥をつくる準備で、眼のまはる程忙しい。釜の下から上る煙と、釜の中から湧く湯気とが、まだ消え残つて

ゐる明方の靄と一つになつて、広庭一面、はつきり物も見定められない程、灰色のものが罩(こ)めた中で、赤いのは、烈々と燃え上る釜の下の焔ばかり、眼に見るもの、耳に聞くもの悉く、戦場か火事場へでも行つたやうな騒ぎである。五位は、今更のやうに、この巨大な山の芋が、この巨大な五斛納釜の中で、芋粥になる事を考へた。さうして、自分が、その芋粥を食ふ為に京都から、わざわざ、越前の敦賀まで旅をして来た事を考へた。考へれば考へる程、何一つ、情無くならないものはない。我五位の同情すべき食慾は、実に、此時もう、一半を減却(げんきやく)してしまつたのである。

それから、一時間の後、五位は利仁や舅（しうと）の有仁（ありひと）と共に、朝飯の膳に向つた。前にあるのは、銀（しろがね）の提（ひさげ）の一斗ばかりはいるのに、なみなみと海の如くたたへた、恐るべき芋粥である。五位はさつき、あの軒まで積上げた山の芋を、何十人かの若い男が、薄刃を器用に動かしながら、片端から削るやうに、勢よく切るのを見た。それからそれを、あの下司女たちが、右往左往に馳せちがつて、一つのこらず、五斛納釜へすくつては入れ、すくつては入れするのを見た。最後に、その山の芋が、一つも長筵の上に見えなくなつた時に、芋のにほひと、甘葛（あまづら）のにほひとを含んだ、幾道（いくだう）かの湯気の

柱が、蓬々然として、釜の中から、晴れた朝の空へ、舞上つて行くのを見た。これを、目のあたりに見た彼が、今、提に入れた芋粥に対した時、まだ、口をつけない中から、既に、満腹を感じたのは、恐らく、無理もない次第であらう。――五位は、提を前にして、間の悪さうに、額の汗を拭いた。

「芋粥に飽かれた事が、ござらぬげな。どうぞ、遠慮なく召上つて下され。」

舅の有仁は、童児たちに云ひつけて、更に幾つかの銀の提を膳の上に並べさせた。中にはどれも芋粥が、溢れんばかりにはいつてゐる。五位は眼をつぶつて、

唯でさへ赤い鼻を、一層赤くしながら、提に半分ばかりの芋粥を大きな土器（かはらけ）にすくつて、いやいやながら飲み干した。

「父も、さう申すぢやて。平（ひら）に、遠慮は御無用ぢや。」

利仁も側から、新な提をすすめて、意地悪く笑ひながらこんな事を云ふ。弱つたのは五位である。遠慮のない所を云へば、始めから芋粥は、一椀も吸ひたくない。それを今、我慢して、やつと、提に半分だけ平げた。これ以上、飲めば、喉を越さない中にもどしてしまふ、さうかと云つて、飲まなければ、利仁や有仁の厚意を無にするのも、同じである。そこで、彼は又眼

をつぶつて、残りの半分を三分の一程飲み干した。もう後は一口も吸ひやうがない。

「何とも、忝うござつた。もう十分頂戴致したて。――いやはや、何とも忝うござつた。」

五位は、しどろもどろになつて、かう云つた。余程弱つたと見えて、口髭にも、鼻の先にも、冬とは思はれない程、汗が玉になつて、垂れてゐる。

「これは又、御少食ぢや。客人は、遠慮をされると見えたぞ。それそれその方ども、何を致して居る。」

童児たちは、有仁の語につれて、新な提の中から、芋粥を、土器(かはらけ)に汲まうとする。五位は、両手を蠅でも

逐ふやうに動かして、平に、辞退の意を示した。
「いや、もう、十分でござる。……失礼ながら、十分でござる。」
もし、此時、利仁が、突然、向うの家の軒を指して、「あれを御覧(ごらう)じろ」と云はなかつたなら、有仁は猶(なほ)、五位に、芋粥をすすめて、止まなかつたかも知れない。が、幸ひにして、利仁の声は、一同の注意を、その軒の方へ持つて行つた。檜皮葺(ひはだぶき)の軒には、丁度、朝日がさしてゐる。さうして、そのまばゆい光に、光沢(つや)のいい毛皮を洗はせながら、一疋の獣が、おとなしく、坐つてゐる。見るとそれは一昨日(をととひ)、利仁が枯野の路で手

捕りにした、あの阪本の野狐であつた。
「狐も、芋粥が欲しさに、見参したさうな。男ども、しやつにも、物を食はせてつかはせ。」
利仁の命令は、言下(ごんか)に行はれた。軒からとび下りた狐は、直に広庭で芋粥の馳走に、与(あづか)つたのである。
五位は、芋粥を飲んでゐる狐を眺めながら、此処へ来ない前の彼自身を、なつかしく、心の中でふり返つた。それは、多くの侍たちに愚弄されてゐる彼である。京童(きやうわらべ)にさへ「何ぢや。この鼻赤めが」と、罵られてゐる彼である。色のさめた水干に、指貫(さしぬき)をつけて、飼主のない尨犬(むくいぬ)のやうに、朱雀大路をうろついて歩く、

憐む可き、孤独な彼である。しかし、同時に又、芋粥に飽きたいと云ふ慾望を、唯一人大事に守つてゐた、幸福な彼である。――彼は、この上芋粥を飲まずにすむと云ふ安心と共に、満面の汗が次第に、鼻の先から、乾いてゆくのを感じた。晴れてはゐても、敦賀の朝は、身にしみるやうに、風が寒い。五位は慌てて、鼻をおさへると同時に銀（しろがね）の提に向つて大きな嚏（くさめ）をした。

（大正五年八月）

底本：「現代日本文学大系43芥川龍之介集」筑摩書房
　　１９６８（昭和43）年８月25日初版第1刷発行
入力：j.utiyama
校正：吉田亜津美
１９９９年５月29日公開
２００４年2月17日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。